特集　つながりでとらえる世界

バスケットを通じたガーナ農村と世界の結びつき

北海学園大学経済学部講師　牛久　晴香

1. アフリカのかごバッグと日本

人間は古くから身近にある植物や動物の革を使ってバスケットをつくり，生活の用を満たしてきた。バスケットは各地の生態環境と，それを利用してきた人びとの知恵や手技をありありと伝えてくれる。現在では「手づくり」や「天然素材」の品物を求める消費者に向けて，各地のバスケットはより商業的につくられ，輸出されてもいる。アフリカを例にとれば，ケニアのサイザルバックやモロッコの「マルシェバッグ」などは，インテリア用品や，いわゆるかごバッグとして日本のいたるところで販売されている。わたしが研究を続けてきたガーナ共和国ボルガタンガ地方の「ボルガ・バスケット」も，そのようなバスケットのひとつである（写真1）。

写真1 日本の百貨店で売られているボルガ・バスケット
（2013 年 4 月筆者撮影）

2. ガーナの国土とボルガタンガの地場産業

ガーナの国土は日本の本州と同じくらいの大きさで，南北に細長い形をしている（図1）。国土の南側がギニア湾に面していて熱帯収束帯の南下を阻むため，ガーナの南部には一年を通じて豊富な雨がもたらされる。ギニア湾から北に離れるほど雨季と乾季の差が明瞭になり，雨量も少なくなる。雨量によって植生も変わり，首都のアクラから車でガーナを縦断すると，鬱蒼とした森林からイネ科草本のサバンナへと景観が移り変わっていくようすを楽しむことができる。

ガーナはカカオや金（きん），木材の輸出国として広く知られている。これらが産出されるのは，雨量が多く森林が広がる南部である。最近ではギニア湾で採掘される石油も主要な輸出品となっている。他方で，資源に乏しい北部のサバンナ地帯には目立った産業が発達せず，南部と比べて経済的にも貧しかった。そんな北部サバンナにおいて，ボルガタンガ地方で局所的に発展していったのがボルガ・バスケット産業である。

ボルガ・バスケットは，アフリカ原産のイネ科草本であるギネアキビ（*Panicum maximum*）を使って編まれる[1]。地元では使わないバスケットで，主に欧米諸国や日本に輸出される。直近 10 年の輸出額は毎年 1 億円ほど，つくり手は 5 千人から 1 万人におよび，ボルガタンガ地方では農業に次ぐ重要な地場産業となっている。

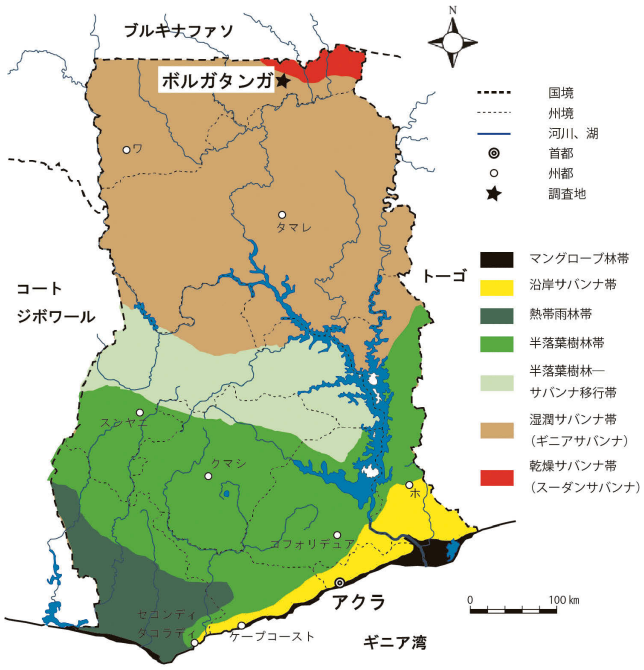

図1 ガーナ共和国の地図
（Abbam et. al.（2018:122）をもとに筆者作成）

3. さまざまな主体の交わり

ボルガ・バスケットが「誕生」したのは 1950 年代と考えられている。木本に乏しいボルガタンガ地方ではイネ科草本から多様な日用品をつくってきたが，ボルガ・バスケットの直接の「祖先」にあたるのは，草製の酒の濾（こ）し器である（写真2）。隣国ブルキナファソの商人がこの濾し器に商品としての可能性を見出し，見た目やつくり方を変えていったのがはじまりだった。

その後のボルガ・バスケット産業の発展には，ガーナ政府，国際開発機関，国内外の民間企業やフェアトレード団体，地元の自営商人，つくり手など，さまざまな主体が関

1 かつては地元に自生するベチバーグラス（*Vetiveria nigritana*）を使っていたが，現在ではガーナ南部からギネアキビを取り寄せるようになった。

写真2 ボルガ・バスケットのもととなった濾し器
（2020 年 10 月筆者撮影）1950 年代まで地酒造りの工程で使用していた。写真は当時の濾し器を 2014 年に再現してもらったもの。

写真3 バスケットづくりのようす（2010 年 10 月筆者撮影）家事や育児，他の仕事の合間に，友人や子どもと一緒にバスケットを編む。

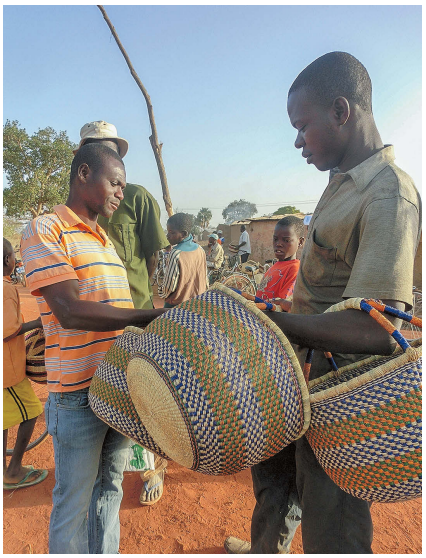

写真4 村の仲買人（2014 年 3 月筆者撮影）

与してきた。彼らはボルガタンガ経済を支える産業を創ろうと，商品開発や品質向上，広報や国際取引のしくみづくりに尽力してきた。

ただし，それぞれの主体が望ましいと考える日々の生産や売買のあり方は異なる。たとえば諸外国の企業は，収益を上げることに加えて，つくり手がバスケットからより多くの収入を得られるようになることを願っている。そのために，規格や納期の遵守といった国際取引の「常識」につくり手も従う必要があると考える。

他方で，つくり手にとってバスケットづくりは生計を成り立たせるための複数の経済活動のうちのひとつである。彼らは家事や他の仕事との兼ね合いをとりながら，自分の都合のよい時間に自宅でバスケットを編む（**写真3**）。高値で売れることは望ましいが，一方的に決められた規格や納期のせいで，せっかく美しく編みあげたバスケットの買取を拒否されるならば，そうした企業にはバスケットを売らないほうがよいと考えるつくり手は多い。両者にとっての「望ましさ」が違うことで，誤解や衝突が生じることもある。

写真5 製作状況の確認のため，編み手を訪ねる仲買人
（2013 年 12 月筆者撮影）

4. 仲買人というミドルマン

そこで重要になるのが，ボルガタンガのつくり手と諸外国の企業とをつなぐ人の営みである。文化人類学では，異なる構造や社会の間に立って両者の関係をとりもつ主体をミドルマンと呼ぶ。ボルガ・バスケット産業におけるミドルマンは，編み手と同じく村で生活を営む仲買人である（**写真4**）。

仲買人は企業が求める商品を集めて売ることで収入を得るが，つくり手がバスケットを編まなければそもそも仕事にならない。それゆえ仲買人は，企業の要求に応えつつ，つくり手の事情にも合う生産と売買のしくみを創出してきた。たとえば，つくり手には今までどおりバスケットを編んでもらいつつ，企業の指定と合っているか事前に確認しに行く体制を整える（**写真5**），納期を嫌うつくり手も巻き込める新たな売買の方法を考案する，などである。両者の言い分に折り合いをつけるミドルマンの実践が，ボルガタンガと世界とを結びつける要となっている。

バスケットというひとつのモノから，さまざまな人間の営みの歴史や，その結びつきの複雑さが見えてくる。バスケットを買う自分も結びつきの一部と考えれば，つくり手の生きるアフリカ農村や，開発やフェアトレードといった現象にも興味がわくはずだ。ぜひお近くでボルガ・バスケットを探し，手にとってみてほしい。